

# 「アパレルの町・岐阜」の誕生・歩み(1)

昭和40年代の後半には、「岐阜市はアパレルの町」「岐阜産のファッション製品は、東京・大阪と拮抗」と言われました。どのようにしてアパレル産業が盛んになったのでしょうか？

## 1. 岐阜駅前ハルピン街の誕生

岐阜空襲によって岐阜市市街地の8割が焦土と化し、終戦後の昭和21年頃はまだ岐阜駅やその駅前一帯も焼け野原でした。駅前は疎開先から帰った人たち、外地から帰った復員兵や引揚者で溢れましたが、焼け野原の岐阜の町を前にして途方に暮れるばかりでした。



昭和22年ハルピン街

その頃、岐阜駅前に外地から帰ってくる復員・引揚者へのサービスのため、引揚者援護施設として「簡易宿泊所兼相談所」が設けられました。

昭和21年の春、「在外同胞救出学生同盟岐阜地区委員会」の看板が掲げられ、岐阜師範（現岐阜大学教育学部）・岐阜工専（同工学部）・岐阜農専（同応用生物科学部）・岐阜女子医専（同医学部）・岐阜薬専（現岐阜薬科大学）等の200人程の学生が、「簡易宿泊所兼相談所」の援護活動に従事しました。

引揚者の中には、旧満州開拓青少年義勇軍の開拓団員が多くいました。彼らは自力で生活再建を果たそうと、同年11月末に駅前にトラック2棟を建て、引揚者たちの生活再建団体「北満地区引揚民更生社」を結成しました。そしてこのトラック2棟に14戸が入り、飲

食店や古着屋などを開いて生活を始めました。これが岐阜繊維問屋街のもとになったハルピン街の始まりです。その後も入居を希望する引揚者が後を絶たず、ハルピン街はどんどん増築され、翌年末には100世帯を超える状態でした。

昭和22年7月1日「飲食営業緊急措置令」によって外食食堂以外の食べ物関係の営業が難しくなると、ハルピン街は全面的に繊維製品関係の営業に転換しました。主な商品は古着でしたが、昭和23〜24年頃には旧軍の払い下げのテントやシート用の布で作ったズボンも売りました。

また一宮方面の繊維産地から密かに生地を仕入れて、自宅または知人や周辺の人々に委託して既製服を製造販売するようになり、次第にこの既製服の製造販売に重点が移っていきました。そしてこのハルピン街に衣料品を仕入れるお客も次第に増えていきました。

**（昭和22年ハルピン街に入居した人の話）**  
先ずてっとり早くやれることは食べ物店、一杯屋だった。酒類といってもドブロク。それから古着の売買。古着の買い出しに出かけたが、素人のことで、他人のタンスから引き出すことはなかなか容易ではなかった。新品を古着として扱うコツも覚えた。サラシなどもヤミで手に入れた。（軍需品が流れていた）買いだした物は行李詰めに



ハルピン街解体直後の岐阜駅前

するのだが、上に古着、下に新品を入れて取締りの目をごまかした。ヤミ商売は利潤がよかったが、経済警察のご厄介になったこともある。

尾西のスフでズボンを作ったが、若い者が新しい衣料を欲しがっていたので飛ぶように売れた。

## 2. ハルピン街の移転と、西問屋町繊維街・マルフジ繊維街

ところで、ハルピン街は正式に認可を受けて建築されたものではなかった。ので不法建築とされ、同駅前広場の拡張計画のために再三、移転を迫られていました。

### （当時の住人の話）

岐阜駅前に掘建て小屋を造ろうとしたら、市の区画整理地域だから困るという。行き先がないから何とかして欲しいと、県や警察へ陳情した。やっと一戸三畳ほどの掘建小屋を造ることが



昭和25年・岐阜駅前の北

できた。この一坪半の小屋で生活し古着商売をやった。

岐阜市の再三にわたる立ち退き請求に、ハルピン街内部にもようやく立ち退いても良いという機運が出てきて、昭和23年7月立退既成同盟が結成されました。ハルピン街移転先の敷地問題等で二転三転もありました。

しかし昭和25年7月になってようやく、「7月20日から六日間の間に、岐阜駅前ハルピン街147世帯全部が真砂町12、13丁目西の大宝町に移転先」と決定。4年越しの難問題もやっと落ち着き、懸案の岐阜駅前広場の拡張工事も行われることになりました。

大宝町へ移ったハルピン街は、呉服通り（現・日ノ本町）と西問屋町の二地区に分かれました。そして25年7月25日、西問屋町65店は「西問屋町繊維

街」を結成しました。

それに対し、「大宝町へ移転したものの、商売には不向きだ。やはり岐阜駅へ、より近い地点へ」というグループがありました。人々は、金町8丁目の岐阜車輛株式会社に「土地を売ってほしい」と交渉しましたが、「売るわけにはゆかぬが、商売をやるなら一緒にやるう」ということになりました。こうして、25年8月14日「ハルピン街繊維品幹旋所」が設立され、11月にはマルフジ繊維街が建設されました。

**（設立した遊休ミシン「元岐阜県副知事だったGさんの話」）**

終戦当時、岐阜市周辺には4万台からの遊休ミシンがあった。このミシンが岐阜の繊維問屋町の発展に役立った。今日の問屋町の反映は、このミシンのおかげといてよい。企業家が目を付けた。繊維関係の復活組もほっておかない。内職にもってこいの武器だった。無法集団の持ち出しもあったようだ。ともかくミシンはフル回転した。ミシンは、戦争のため減少したというのではない。ミシンは金属供出の対象とはならなかったからだ。

## 3. 本格的な街づくり・伸びる企業

昭和25年後半、繊維問屋町では本格的な町づくりが始まりました。まず共同毛織の工場跡地（真砂町13丁目）三千坪を買収し、千坪は一条通りに譲りました。



昭和28年・繊維問屋街

昭和26年4月中央通り着工、8月入居、9月40店全部がオープンし、「中央通り発展会」が生まれました。この全店オープンの大売り出しには、「開店大売り出し」の赤い幟が岐阜駅前まで1m間隔にずらりと立ちました。そして26年暮れには岐阜繊維問屋町連合会が結成されました。

この頃の岐阜の問屋町人は、まだ商売人としては決して一人前とは言えませんでした。出張販売は、商売に機動性をもち広く販売網を伸ばさなければなりません。ところが、販売先には強力な競争相手（東京、大阪、名古屋等）が待ち構えていました。既製服としても戦前からの伝統を持った産地が競争の痛手から徐々に立ち直ってきていたのです。

安定期を迎えると改めて商売の信用

が問い直され、岐阜の問屋町人は、仕入れにも販売にも新しい産地づくり・信用のノレンを掲げるためにずいぶん努力を重ねました。技術の向上・品質の改善・商機のキャッチ・資金の合理的な運用操作・顧客へのサービス等に努めました。また幅広く商売を展開するには、現金取引・短期決済というような単純な決済からの転換が強く求められました。

昭和27年頃、問屋町の業者にはそれぞれ仕入れ客が定着し始めました。顧客獲得のため、かつてのような粗製乱造は許されなくなり、デザイン・縫製技術・価格などの点で業者間の競争も激しくなりました。そんな中、当然岐阜の製品の品質は向上していきました。

岐阜製品の名は全国各地に広がり、広島から問屋が仕入れに来るほどでした。岐阜製品は、この人たちの口から山陰・九州・四国方面にまで宣伝されたのです。

こうして昭和28年頃には、16町内で600商社余りを数える繊維街ができあがりました。（次号へ続く）

○この文章は、『岐阜市史・現代・通史編』『岐阜既製服産業発展史』『わかりやすい岐阜県史』等をもとに、後藤征夫がまとめました。